

編集委員会委員

大和裕幸 | YAMATO, Hiroyuki | 東京大学大学院新領域創成科学研究科教授

本誌編集に關係して、あまりまとまりなく感じる点2点ばかり。

(1) 情報化時代の危ない精神

幸運なことに本誌は例外であるが、私の關係している學術雑誌には論文が集まらないか、集まってもレベルがずいぶん下がったのでは、と思われるものが多い。運輸交通分野でも造船・航空や自動車など機械メーカーでは、不況で忙しく金もないというわかりやすい説明もあるが、社会全体の構造的変質にこちらがついていけない感じがする。

メディアは大きく変わってきた。学生の中には、インターネット検索で引っかからないものはたとえ自分の主に関係する学会の論文等であっても見ない、という風潮がある。留学はホームページのきれいなところへ、という話もある。情報化時代といいながら、學術雑誌などもっとも貴重な情報源・コンテンツを取り巻く状況もいささか混乱状態である。既成の権威ある学会や學術雑誌にとっては崩壊感を味わっている。

新聞や識者によると、欧州を中心にインターネット金融などの商業利用にはそろそろ規制を求める声が強くなっていて、アメリカのバブルが収束して、反省と対策が始まるといわれている。わが国でも最近のインターネット関連企業は多くは上場され赤字のまま回っていくスタイルという。アマゾンドットコムも赤字だそうである。

このようなことから、ものをつくるとか論文を書くという時定数の大きい行為が、スピード、アジリティという企業戦略で重要と考える項目にあまりそぐわない印象をあたえるようになっていっているのも事実であろう。電子マネーのような瞬時性をもつものは儲かるが、製造業など時定数の大きい行為は情報化時代には金になりにくい。學術論文が成り立ちにくくなるのもこのような落ち着いたものを考えること、はるか先をみて努力していくことに対する不利益感をもたらしているのではなからうか。

情報技術のもたらした構造変化と奇妙な精神状況の中で、従来の学問が持つ確かなスタイルを踏襲しつつ、あたらしい領域と手法への転換をはかりながら実質のより一層の向上を図ることが編集者のこれからの役割であろう。それは製造業がうまく情報技術を使えるようになるのと同じことであるように感じている。

(2) 「運輸技術研究」

本誌は「運輸政策研究」であり、技術研究はスコープが狭い。

運輸關係技術は国民の合意の上に成り立ってこそ陽の目をみる、その意味で技術研究も総合的な政策研究に直結するようなものをという意味で技術的論文を受け入れている。私事であるが、船舶工学を卒業し、飛行機の設計と飛行試験に7年間従事し、その後、また造船教育の現場に戻った。船舶と飛行機といった国民生活に大きな影響を持つ社会的政策的対象物ながら、マーケットメカニズムにきわめて敏感に反応する交通機械類をどう健全に技術発展を進めるかは常に悩むところである。たとえば、運輸コストの極端な削減の中で、安くてメンテナンスにお金をかけない、乗員乗客にとっても環境にとっても不安全的な乗り物が珍重されているといえなくもない。われわれ機械屋にも安全や効率、環境保全など明確な評価軸がないものははっきりと定め、これに対して技術を通して実現できることを明確に提示することが求められている。その点で、社会基盤分野で行われている便益とコストの評価などの努力に比べて、作れといわれたらいいものを作る、というあまりに受身の姿勢で終始してきたような気がする。造船の分野でいえば、わが国の国内輸送の半分近くを海運が担っている、というにしてはわが国に適したタンカーやRORO船、一般貨物船などの船型や、効率的な海運を支えるための運航支援システムの開発などがなされていない。結果、旧態依然とした中で、どのような海運システムが効率的で、それにはどのような船舶を造ればよいかを発想する手法ももたず、船腹調整に関するディレギュレーションが行われたにもかかわらず新しい船舶を建造する意欲がないかの状況を作り出している。交通機械を作る側もまた運航する側も、どのようなシステムであればどれだけのコストでどれだけの便益が確保でき、企業としても競合するほかのシステムに伍してやっていける、ということハードばかりでなく運航スケジュールなどを含めたソフト面までのシステム設計を考えなくてはならず、そのためのデータの蓄積とその分析・設計方法を確立することが急務である。各社の体質改善や競争力の向上、国立研究機関や大学の独立行政法人化などで攻めべきポイントのように思われる。責任ある交通機械供給者としては、自身がやってきた「運輸技術研究」をさらに広げていかななくてはならない。「運輸政策研究」はそのような発想の研鑽の場であり、筆者は交通機械技術者が多くの論文・論説を出せるようになることを当面の目標として、編集の任にあたっている。